

第12回 教育課程編成委員会 議事録

日時：2021年7月1日（木）16：00～17：00

場所：厚木看護専門学校 会議室

[出席委員]

三宅 正敬委員	厚木医師会副会長	三宅眼科医院院長
山下 巖委員	厚木病院協会会長	
吉村 由紀委員	県看護協会県央支部副支部長	亀田森の里病院看護部長
神保 京美委員	伊勢原協同病院副院長兼看護部長	
村越 みどり委員	県立厚木東高等学校校長	

1. 議題

- 1) 2020年度 卒業時に期待する能力の評価について
- 2) 2020年度 各学年のねらいと到達目標の評価について
- 3) コロナ禍における学習について
- 4) 看護師養成新カリキュラムの変更点について

[配布資料]

2020年度 卒業時に期待する能力に関するアンケート結果
2020年度 各学年のねらいと到達目標に関するアンケート結果
コロナ禍における学習に関するアンケート結果 2021年3月
看護師養成3年課程 新カリキュラム ガイドラインに基づく新旧対照表

2. 報告結果

<学校長挨拶>

この会議は文科省から認定を受けている職業実践専門課程の必要要件となる会議であり、当校以外の広い見識を持つ方々から教育課程に関する意見を伺うものである。

昨年度まで、3年課程の看護第一学科と2年課程定時制の看護第二学科の二学科を運営してきたが、この3月で看護第二学科は廃止となり、最後の卒業生を無事に送り出すことができた。また、国家試験全員合格で締めくくることができた。4月からは3年課程のみとなり、名称を看護学科と改めた。

来年度、国が看護師養成カリキュラムを変更することに伴い、検討を重ねている最中である。

会議の議事録公開に伴い、委員の方々の所属、役職、名前を議事録に記載し、ホームページ上に公開させていただくということを了解いただきたい。

<議題1 2020年度 卒業時に期待する能力の評価について>

大河原委員 添付資料の1～3についての留意点について。今回のアンケート調査の回答者数が看護第一学科は1年生86名に対し47名、2年生82名に対し63名、3年生76名に対し75名、看護第二学科は3年生30名に対し25名と回答者数が学年によってばらつきがある。

全ての設問で「そう思う」「どちらかというと思う」「どちらかというと思わない」「そう思わない」という設定であったが、一つだけ「その他」という項目を設けてしまい、それに対して8名の学生が回答していた。資料2と3においては、グラフ上で「どちらかと言うと思わない」「そう思わない」の順が逆になっている。

従来、卒業時の実践能力として看護の判断能力であるアセスメント力が身につけているかどうか具体的な項目でアンケート調査をしてきた。2020年度はカリキュラムに設定されている卒業時に期待する能力という総合的な能力を問う設問とした。看護第一学科卒業生75名は、すべての項目で「そう思う」「どちらかと言うと思う」という回答はすべて95%以上を占めていた。看護第二学科卒業生25名は、設問1と2については「そう思う」「どちらかと思う」と回答した者の割合は95%以上であった。ほかの設問は「そう思う」「どちらかというと思う」と回答した者は100%であった。以上のことから概ね、看護第一学科、看護第二学科の卒業生は卒業時に期待される能力について習得できたと認識しているという評価となった。

<議題2 各学年のねらいと到達目標について>

大河原委員 「看護を学ぶ学生として広い視野を養いながら人間の生活に関心を広げ看護学を学ぶ上での超的能力を培う」というねらいの基に四つの到達目標が設定されている。この四つの到達目標に対する回答の結果である。「そう思う」「どちらかと言うと思う」と回答した者が91から100%の範囲の回答であった。

神保委員 Q1) これは毎年取っているデータなのか。それならば、変化があったところについて教えていただきたい。

島田委員 Q1) について。昨年度までは看護の実践能力という厚生労働省から出された文言で、出来たか出来ないかを調査したので、同じ設問ではない。実践能力については、単位が取れば習得できたという回答になってしまっていたため、ずっとこのアンケートについては課題としていた。新カリキュラムに向けてこの到達度を明らかにしたいということで昨年度初めてこの設問でアンケート調査を実施した。

- 神保委員 知識と技術の統合ということでは、コロナ禍で実習の機会が少なくなっていることが大きく影響しているのではと考えていたが、意外とそうでもないという結果だったので何が影響しているのかということを知りたくて質問した。
- 学校長 昨年度は臨床に行く機会が少なく、臨地でやるかなりの時間を学内実習として当てた。それでも可という厚労省の方針があったが、こういった状況の中で学生がどう感じていたのかを確認したかった。
- 三宅委員 Q2) 学校で身につけたことが現場に立って実践して初めてわかったといった差については検証されているのか。されてないのであればやってもらいたい。在校生の参考にもなる。
- 学校長 Q2) について。卒業時の出来上がりとその後のことも学校の評価として重要なことと考えている。卒業後どこまで追えるのかという課題はある。今現在は、働いて3ヶ月目のところで卒業生を集めて共有するという内容にとどまっている。さらに、卒後一年経過した2年目で主要な就職先病院の看護部を訪問して、卒業生の状況を聞きという機会を設ける。今後、卒業生個々への調査も検討したい。
- 島田委員 卒業生が就職した病院の看護部に、卒業生の状況を聴くし調査している。ICTを活用して、卒業しても学校とネット上でつながっている。これを活用して、本人と看護部と両方で評価していきたい。看護部の評価から、専門的知識・技術を強化していかなければならないと考えている。どちらかといえば、倫理的配慮や態度面は良いという評価をいただいているが、臨床判断能力を高める必要がある。
- 吉村委員 Q3) それは他の看護学校と比較しての結果なのか。
- 島田委員 Q3) について。他校との比較ではないが、各施設の看護部から頂いた5段階評価では、知識技術が全体に比較して低いという結果であった。
- 神保委員 知識と技術が看護学校の3年間で身につくことができるのは限界があると考えている。率直に申せば、そこを非常に期待しているわけではなくOJTで身につけてもらいたいと思っている。(厚木看護専門学校の卒業生の) 良い面は、勉強する気持ちがあるので、課題を出してもきちっと取り組んでくる。態度がしっかりしている者は結果的に1年経って随分伸びるという印象を持っている。ただし、最低ラインの技術を習得しておいてもらわないと出される課題に対して対応できない。そういう意味では、知識技術の面がもう少し上がった方がいいとも思っている。
- 山下委員 Q4) 回答数はいくつであったのか。
- 大河原委員 Q4) について。回収率は100%ではない。回答数も学年で差がある。
- 山下委員 回答数は定員のほぼ半分になっている。このアンケートの回答は強制的

なものではないということか。

大河原委員 例年は、紙面で配布して教室で回答してもらっているため、100%近い回答になっている。今回はアンケート調査機能のソフトでアンケートのフォーマットを配信して、学生はタブレットやスマートフォン上の画面でクリックして回答してもらった。回答を呼び掛けたが、全員の回答が揃うことは困難であった。

山下委員 職員満足度等は、回答者数が半分ぐらいたと出さなかった人たちがなぜ出さなかったのかが問題になってくる。できれば100%に近いデータを出してもらいたい。

Q5) 資料3のオンライン授業の学習の成果があったかという設問に関して。国家試験を全員合格している3年生が、オンライン授業の学習成果について「思わない」という人たちは、私たちはもっと勉強したかったという意味で回答しているかもしれないので、オンライン授業の質を少しでも上げていくことが大事だと考える。

副学校長 Q5) について。2020年度はオンライン授業導入の時期であった。教員達も操作方法やオンライン授業のやり方などを学びながらであった。今年度は、それを改善しつつ、あらたなICTシステムを駆使して、学生たちが遠隔講義を受けることができる機会を設け、看護師国家試験支援システムや看護技術の動画のサブスクリプションサービス等、色々と活用できるようにした。今年度は良い結果が報告できるというふうに私たちも考えている。

学校長 今現在は対面授業に戻っているが、月に2回ぐらい定期的にオンライン授業を実施している。いつでもオンライン授業に切り替えられるよう、教員、学生が慣れておくという備えをしている。

島田委員 オンラインに特化したアンケートは取っているわけではないが、昨年にオンライン授業をやり始めた時期と中間の時期でアンケート調査した。学生は学習環境の所で困っていた、教員からはオンラインシステムの操作で困難があるという結果が出てきている。

今年は新しいアプリケーションを学生の方が使いこなしていて、アクティブラーニングという深い学習がオンライン上でもできることを期待している。グループワークもオンライン上でも少しずつできるようになってきている。

山下委員 オンライン授業は生徒さんの顔が見えない。私も実施してみたが、ひたすら喋っていて学生の反応がわかりにくい。対面だと反応を見ながら対応できるが、オンライン授業だと予備校のような画一的なことしか言えないところがあってなかなか難しいところもある。

- 副学校長 今のオンライン授業のシステムは、学生の顔が見えるのは25人が限界である。必ず端末のカメラをオンにして教員に顔が見えるようにと学生には言っている。私は別のモニターで学生がどのような画面で見ているかを確認しながら授業を行っている。
- 学校長 1年生はパソコンを購入して使えるよう推奨しているが、2年生3年生はスマートフォンの画面でオンライン授業を受けている学生もいる。
- 三宅委員 Q6) 資料2の1年次生の「自己表現を高めることができたか」「学習環境を整えることが出来たか」に対して「そうは思わない」「どちらかと言うとそう思わない」と回答している学生に対してきちんとケアができるのか。
- 島田委員 Q6) について1年生は入学以来、臨地実習を1度も出来ていない学年で学内での実習をずっと続けてきた。そういったことから、学内でのグループワークを通しての自己表現は割とできている印象がある。しかし、よく知らない環境下で自分のことを表現する、自分の伝えたことを説明するといった経験はできていない。臨地で実習を行っていないという不安があるのではないかと思う。この学年は7月に初めて臨地実習が予定されているが、これに対するフォローを手厚くやっていきたい。現段階で退学者や休学者が一人も出ていない。その意味では、孤独を抱えている学生はいないと思っているが、チューター制をとりながら注意深く関わっていきたい。

<議題4 看護師養成新カリキュラムの変更点について>

- 島田委員 保健師助産師看護師養成学校養成所指定規則の一部が改定され、カリキュラムの変更が予定されている。総単位数97単位から102単位と5単位の増。「専門分野Ⅰ」「専門分野Ⅱ」「統合分野」が「専門分野」に抱合された。当校は新カリキュラムに向けた検討中で3月ぐらいに報告できると考えている。
- 神保委員 Q7) 「他割り当て単位」とはどんな形で活用する予定か。
- 島田委員 Q7) について。臨床判断能力が弱いと考えているので、そこを強化できる割り当てにしたいと考えている。
- 神保委員 Q8) 統合分野になるのか。実習受ける側としては関心あるところであったため伺った。
- 山下委員 この単位というのは時間で考えるのか週の単位で考えるものなのか。
- 学校長 1単位はだいたい15時間もしくは30時間である。
1時間とは45分間。現行のカリキュラムは3000時間となっているが新カリキュラムは時間の枠は撤廃されて単位で組み立てられる。

- 山下委員 Q9) ただでさえ忙しく大変なカリキュラムの中で単位数増に対してどう時間を作るのか。現実3年間でこれだけの量を運営していくとなるとかなりハードだと思う。これで単位数をさらに増えるとなるとどこを削ってどうするのか時間を短くするのか夏休みを減らすのか。
- 学校長 Q9) について。時間を短くするということを考えている。実際、当校の現行カリキュラムは103単位でかなり多く実施しているが、講義内容を精査していくと、重なる部分も多々あるため、そこを整理していく必要がある。
- 山下委員 Q10) 現行が103単位であるならば可能であるということか。
- 学校長 Q10) について。それでも減らさなければならぬと考えている。
- 山下委員 タイトであると考える力がなくなってくのではないかと心配である。
- 副学校長 学生には自主的に学習して欲しいという期待がある。タイトなカリキュラムと自主的に学習に臨む時間をどのように設けていくか検討している。課題を与えられれば行すが、与えないと行わないという学生を育てたくない。
- 三宅委員 看護師養成を3~4年間でやるには限界がある。どんどん医療は進歩して覚えることは増えている。しかし、最終的には人間形成だと思う。現場に出て先輩に教わって勉強しなければならぬことを知る。挨拶がきちんとできるとかそういうことができる人を育ててもらってそれが学校の役割ではないかと思う。
- 吉村委員 臨床の看護でも同じだと思っている。自ら足りない部分を認識しながら行動できる人材が求められている。そういう人間形成を進めていただければ良いと思っている。
- 学校長 指示したことについて学生は一生懸命行う。省エネの傾向があるのか、指示以外のところは手付かずでいる学生が多い。教育側が仕掛けて行く必要がある。そのままとなかなか行わない現状がある。
- 吉村委員 「なぜ？」という感覚があるともう少し勉強してみよう調べてみようとなるのかと思う。
- 山下委員 最終的には国家試験を受からないといけない。国家試験の勉強する時間も当然必要となってくる。課題も一生懸命行わなければならないが、国家試験を受からないと看護師になれないし夢も叶えられない。時間数を増やせばいいというものでもないと思う。目標の一つは人間形成と思うがやはり国家試験を受からないと話にならない。
- 学校長 科目数を増やせば人間形成が図れるわけでもないため、どのように学校生活を過ごせばよいかを考えている。例えば行事への参加といった機会があるが、行事は単位に含まれていない。さらには、コロナ禍の影響で

文化祭も実施できていない。勉強は大変だが、行事に打ち込むのも厳しい印象である。

山下委員 医師は6年制であるが、6年生の時点でやはり国家試験の勉強を中心に行っている。看護師の国家試験問題も見てみたら結構難しい。受からないといけない話でそれは第一義だと思う。

学校長 国家試験対策はカリキュラム外で行っている。やらないと本当に受からない。1年生のうちから、朝始業前に数名に絞って学習に取り組んでいる。強化しないと受からない学生も出てきているのが現状である。

島田委員 1年生の時に学習習慣をつけることを大事にしている。自ら勉強したくなるよう育ててほしいが、まずは机に向かう習慣がなかなかついていない。まずは机に向かわせる。

副学校長 自宅での学習時間がゼロという学生がいる。1年生担当の先生がまずは10分間机に向かってということをして4月から一生懸命やっている。

島田委員 そうやっていくことで、2年生3年生が自ら勉強したいとなってくれるかなと思って一生懸命やっている。

学校長 卒業生の話では、働いてからの方が勉強が大変だと言っている。

山下委員 看護学校に入学してくる人は本気で3年間で看護師になろうと考えて入ってきている方が多いと思う。やはりライバルは4年制の大学。彼らはやはり4年間で少しエンジョイしながら看護師になればいいと思っている人もいるであろう。看護学校に入ってくる人は看護師になりたいという強い意志を最初から持っていると思う。だからいろいろなことができるのかなと思うのだが、カリキュラムを詰め込むと燃え尽きてしまう。1年生から国家試験対策をするのは受かりたいから来ているわけでもいいのかもしれないが。

村越委員 主体的に学べないというのは日本の教育の課題。本校でも以前から大きな課題になっている。厚木看護専門学校のパンフレットなど拝見するとICTがだいぶ飛躍的に進んでいる。コロナのピンチを逆に進歩に導いた。国家試験に向けて知識、技術などにかく覚えなければならないものは演習で定着していく。ICTによる学習支援システムはかなり可能性があると考えられる。看護の英語のアプリや看護の知識をネット上で学べるようなものが出てきている。それらをうまく利用することで自宅での学習時間が増えていると思う。

本校でも、ICTによる学習支援システムを活用するようになって自宅での学習がかなり増えてきている。新しい指導要領によって小中高等学校は求められる学びの質が変わってくる。覚えてアウトプットすれば良かったものが、記述したものを評価する、発表する、パフォーマンスでプレ

ゼンテーションするといったことを評価するということが増えてきている。定期テストの割合も少し変わってきている。臨床判断能力が求められるという時に評価の中でどういう風にそれを国家試験の中で問うのかと疑問に思った。予期せぬいろいろな状況に知識を組み合わせでどう対応するのか自分の中の答えを出すというそういう力をどうやって測るのか。それを測るということをしてできなければ国家試験が受からないということになれば学生はやる。

- 学校長 国家試験問題の配信を教員が学生に向けて行なっている。
- 副校長 解答の有無が一目瞭然で教員が把握でき、学生は自分の成績の位置づけがわかるものになっている。自分の目で見てわかることがやりがいにつながり、黙々とやるよりも成果が見えることで彼らにしては着手しやすいという面がある。
- 村越委員 ICT のすべてが授業に良いかと言うと疑問点はあるが、生徒は好んでやっている。それをうまく活用して生徒を動かすことができれば先生と双方向でグループディスカッションができる等、そういうものを活用していくというのがこれからは避けられない社会となる。高校の現場でも生徒の学習については課題があるので ICT 化には可能性、希望を持っている部分もある。
- 学校長 教科書も電子化した。タブレットにテキストが全部入っているので、出来るだけ活用してもらいたい。看護技術も見て学ぶ動画をどんどん視聴できるサービスを導入する予定である。
- 副学校長 それは本日からサービス開始になる。
- 村越委員 Q11) タブレットは個人持ちなのかリースなのか。
- 副校長 Q11) について。リースで同じ端末を使用している。タブレットの種類が違くと教科書の中でも閲覧できるものできないものがあるという情報があった。そこに対応するだけで授業が進まなくなってしまうことを回避するために全部同じタブレットにした。
- 学校長 まだ評価しきれないところもあるが、ICT を活用していく。人間形成への課題も取り組んでいきたい。また、新しいカリキュラムができた時に皆様にご意見を頂戴したい。

[欠席委員からのご意見]

伊藤 玲子委員 東名厚木病院副院長兼看護部長

コロナ禍における学内実習に対する学生の評価は予想よりも高いことに驚いた。教員の学内実習の工夫が十分であったと感じる。

Q12) コロナ禍において、オンライン授業の学習の成果は何を指標として成果があったと判断したのか。

Q12) についての回答。今回に関しては、学生の成果があったと感じている主観的な回答をもって評価している。それ以外の視点では、試験の結果を含めた教員のカリキュラム評価でもってオンライン授業の成果の評価とした。

Q13) 学内実習に対して学年による感じ方、とらえ方の違いはあったのか。

Q13) についての回答。学年による感じ方、とらえ方の違いはあった。一年次生の場合、学内実習があるときとない時の比較ができないので、95～97%の学生が「思う」「どちらかというと思う」と学実習を好意的に受け止めている印象がある。一方の二年次生は68～79%とその割合が下がっている。個別でどのようにとらえているかについては聴き取り調査しているわけではないので、この違いについて今後、分析し対処していきたい。

山下 喜典委員 厚木市市民健康部長

Q14) WEB 上でオンライン授業を実施する際の留意点はどのようなことがあるのか。

Q14) についての回答。学生が通信障害やオンラインツールの操作方法の習熟度の違いなどによって、オンライン授業に参加できなくなることがないように、通信環境や操作方法の習熟度に対して確認や助言、学校で受講できる配慮などを行った。